

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370212

研究課題名(和文) 勅撰和歌集と古代礼楽思想の和漢比較研究

研究課題名(英文) A Wakan Comparative Study of Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music and an Anthology of Waka (Japanese poems) selected and edited by the Japanese Emperor

研究代表者

渡辺 秀夫 (WATANABE, Hideo)

信州大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：90123083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：平安から室町時代にかけて編まれた21代にわたる勅撰和歌集編纂を支える思想基盤には、中国を中心とする東アジア儒教文化圏に共通する古代儒教による「礼楽」思想が一貫して存在し、この礼楽思想の日本的展開、我が国固有の変容の成果として勅撰和歌集が編纂され続けたこと、さらに、この「礼楽」の思想的基盤(特に、中国古代音楽論)への認識を深めることが、勅撰和歌集研究に不可欠の要件であること等の諸点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Under imperial command, many fine Waka poems were collected in the twenty-one anthologies of poems from many books such as Kokin-Waka-Shu (A Collection of Ancient and Modern Poetry) published at the beginning of the 10th century, up to Shin-Shoku-Kokin-Waka-Shu (Second New Collection of Ancient and Modern Poetry) published in the mid-15th century. These authorized anthologies cannot be analyzed without considering their respective political situation because the ancient Chinese thoughts on manners and music, which is widespread in east Asian Confucianism culture with China being the center, has been one of the backbone ideologies for the compilation of the 21 anthologies of Waka selected and edited by the Japanese emperors (Chokusen-Wakashu) during the Heian and Muromachi era. Hence, a deep understanding of the foundations of this ancient thoughts on manners and music, especially understanding the ancient Chinese music, is indispensable to the studies on the anthology of Waka

研究分野：平安朝文学

キーワード：勅撰和歌集 礼楽思想 和漢比較文学 外来文化の受容

### 1. 研究開始当初の背景

著名な作品に関しては、従来から少なからぬ個別的研究があるが、「勅撰和歌集」を一連の国家的文化事業として、総体的・通時的にアプローチするものは極めて少なく、かつ和漢比較(日中韓比較)文学的な観点から研究したものは、その考察の重要性・必要性にも拘らず皆無に近い。また、現行の研究姿勢は、前近代の儒教的思想基盤を前提とした歴史・文化的な正当なアプローチがなされず、日本古代文学史研究上の大きな欠落となっている。結果として、近代以来の和歌研究は、前近代の東アジア地域に共通する思想的な枠組み(古代儒教、取り分けて礼楽思想)に対する理解に乏しく、古典テキストの解釈に際し、その根拠が曖昧にされ、歴史を逸脱した恣意に流れやすいといった、根本的な欠陥があり、これを正すには、古典古代における古代儒教(礼楽思想)受容に関する復元的検証が不可欠である。

### 2. 研究の目的

本研究は、天皇(院)の名の下に企画・遂行される国家的な事業である勅撰和歌集の編纂は、なにゆえに、またいかなる思想のもとに我が国固有の事象として成立し長きにわたって継続されえたのか、これらの諸点を明らかにすることを最終的な目的とする。具体的には、勅撰和歌集の編纂は、儒教文化の日本の変容の一つであって、しかもそれが我国特有の事象として生成されたこと、及び、和歌文学のもつ力の根源的な深さを知らしめるとともに、古代日本の詩歌をめぐる文化の構造が明確化される。さらに、これまで手薄であった総体としての「勅撰和歌集」の本質が明らかにされ、古代和歌文学史の根幹を成す事象への新たな知見が得られること。また、権力を支える「権威」の問題を通じて歴史学や思想史にも大きなインパクトを与えるとともに、広く儒教文化圏における比較文化論的視野を大きく開くことになる等、以上の諸点を明らかにすることを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究は、近来明確化されてきた和漢比較の視野の下、東アジア儒教文化圏の歴史的動向をふまえ、わが国固有の文学・文化現象である勅撰和歌集の継続的編纂の意義を問うことを通じ、日本的なるものの固有性を広く普遍的な事象のなかに位置づけ、旧来の古典(和歌)文学研究に、学際的・総合的・比較論的な視界を拓こうとするものである。ここにいう「和漢比較の視野」とは、和文世界をその基盤をなす漢文世界との動態的・構造的な相互関係の中で共時的・通時的に分析評価する手法をいう。

本研究を遂行するためには、古代社会を支える儒教的思想・観念——特に、「礼(礼儀)」「楽(音楽)」思想の観点——を前提とするアプローチが必須要件となる。「礼楽」の思想

そのものは、中国のものでありながら、しかも、中国本土にはこのような詩歌の勅撰は存在せず、より儒教的な考えが純粋培養された韓国にあっても、遂に継続的な勅撰詩歌集の編纂は生まれなかった。この最も日本的(国粹的)とみなされて来た文学事象を解明するために、視野を広く東アジアの儒教文化圏のなかに開き、和漢比較文学的な手法のもとに再検証しようとするところに、本研究の大きな特色がある。

このような観点を前提として、平安前期から室町期に至るまで、勅撰という形での和歌集の編纂が、何故かくも不断に継続されたのか、その理由を検証・解明するために、以下のような具体的な手法を採る。

中国・韓国等の儒教文化圏における詩歌と「礼楽思想」をめぐる類似例の調査とその分析結果の比較対照を試み、日本古代に特異な本事象の思想的背景を明らかにする。また、これと並行して、日本古代(平安～室町期)における礼楽思想の受容の様態を、和歌文学ジャンル以外の分野にも広げて調査分析するとともに、十分な解読が為されていない各勅撰集に附属された一連の「序文」群——とりわけ、漢文体で書かれた「真名序」本文の調査・校訂及び正確な解読を徹底し、これを一貫する強固な思想の成果として、勅撰集としての編集意図を明確化する。

### 4. 研究成果

(25年度)

(1)「古今集序を読むために」と題する研究発表を行い(和歌文学会7月例会)、仮名序・真名序の文体的特色に関し、それぞれの利用典拠・材源の位相差を明示することを通じ、読者層の相違及び両序の成立論議に新たな論点を提示した。これにより、後続の勅撰和歌集序の仮名・真名両序の文体を分析するうえでの留意点が明確化された。(2)青島大学に出張し『古今和歌集と礼楽思想』の著者尤海燕氏と科研課題に係る諸問題を論じるとともに、関連資料の収集に努めた。これにより、当該課題に関わる研究姿勢として、従来の専門分野や学会を横断した幅広い見地からの和漢比較研究の必要性をさらに強く確信した(平成25年7月29日～8月3日の6日間)。(3)ポーランド共和国ワルシャワ大学東洋学部日本学科主催の国際会議・第7回ワルシャワ大学日本祭(国際会議)「平成の日本—日本の伝統からの離反と回帰」において「草創期の仮名文について—古今集仮名序をめぐって」と題する講演(ワルシャワ大学図書館・10月14日)を行い、併せて、ヤギェオ大学主催国際会議・古典部門研究発表会に参加した(クラクフ市マンガ博物館・11月15日)、学生・院生および社会人向けの「日本文学・文化と自然」と題する講演(クラクフ市マンガ博物館附属日本文化センター・12月13日)等の研究交流・講演等を行い、西洋、キリスト教文化圏における日本文学・文化理解の様相をつ

ぶさに実見することを通じ、儒教文化圏における文学現象及びその理解の特殊性（普遍性）・問題性を明確化することにより、現今の研究課題を推進する上での指針を得た（平成25年9月30日～同年12月19日の81日間）。

（4）当該科研課題に関わる和漢比較研究上、重要と思われる近代中国の学術論著2点の翻訳をまとめた。〔翻訳〕聞一多「歌与詩」（一「歌」とはなにか—感情の発露・抒情性—、二「詩」とはなにか—記憶・記録・懐抱—、三韻文と散文—「歌」「詩」の融合と「史」の成立）及び、〔抄訳〕朱光潜『詩論』（「第一章 詩の起源」より、「詩歌と音楽、舞踏はその起源を一にする」、「詩歌に保存された、もともと詩・歌・舞が一体であった痕跡」、「第二章 詩と諧隠」中の「詩と諧」「詩と隠」「詩と純粹な言葉遊び」）を訳出した。これらは、本研究課題遂行のための基本的な「歌」「詩」概念の本義と変容、及び詩歌の発生と音楽論、詩歌における遊戯性等を理解するための必須の参考資料と認められる。

（26年度）

5月10日～15日、北京日本学研究中心に赴き、北京日本学研究中心に於いて、「草創期の仮名文について—奏上時に「仮名序」は無かった」と題する招待講演を行うとともに（5月13日）、「嵯峨朝文学の謎」と題する発表を行った同招待講演者 Wiekke Deneke 氏（ボストン大学准教授・日中比較文学）と日中比較文学の研究手法に関する共同討議ほかを行った。これらの成果をもとに、拙著『和歌の詩学—平安朝文学と漢文世界』を刊行した（勉誠出版・平成26年6月・561総頁）。本テーマに関わる章節は、以下の通り。

【和歌勅撰の思想】と題する第一部（和歌の詩学）のうちの、「第六章 和漢比較のなかの古今集両序—和歌勅撰の思想」〔はじめに和歌勅撰の編纂動機 帝徳讃美と和歌 公宴詩の帝徳讃美 『古今集』のうちなる「礼楽」 両序末尾の対照 “からぶみ”（真名序）と“やまとぶみ”（仮名序）の表現位相〕、「第七章 うたのちから 天地鬼神をうごかすもの—「礼楽」と「歌」—」〔はじめに 王の恵みと詩歌の繁盛—『古今集』序と『龍飛御天歌』序— 天子の恩寵としての四時の調和—時令思想と『古今集』四季部—音楽論と和歌—「礼楽」のなかの「歌」— 天人感応と音楽論—天地鬼神を動かすもの—〕、「第八章 古今和歌集序の文学史—和歌勅撰と「礼楽」—」〔はじめに 和歌とはなにか—「うた」の起源・発生論—和歌勅撰の原理—「うたのちから」と「歌徳論」と—〕、「第九章 詩歌の発生論—古今集序の理解をめぐる—」〔はじめに 思想的枠組み—天（気）と人（情）との関係構造— 心情の発動メカニズム 古典解釈における中・近世 古典解釈における 近代をかえりみる むすびにかえて—礼の構造—〕、「第十章 仮名散文の創出—古今集両

序をめぐる—」〔はじめに 和文を支える漢文 仮名ぶみの自立を育む漢文 おわりに〕及び、【補篇 和漢比較研究の視角】中の、〔翻訳〕聞一多「歌と詩」、〔翻訳〕朱光潜『詩論』（抄訳）である。

（27年度）

当初計画のうち、これまでの3年間に亘る儒教的な「礼楽」の思想的背景基盤・思考の枠組みへの着目が、新たな研究視界を開き、この研究手法の重要性が再認識されることに伴い、（1）古典研究には、テキストの分析者側に、作品成立当時の思考法（暗黙の前提的思想基盤）の復元的共有が不可欠であること、（2）従来の研究手法上の限界であった、明示的に典拠を指摘しがたいもの、典拠・素材論では届かぬ受容論にどう向き合うかという課題解決のため、前近代の思考の枠組みの通時的・共時的復元理解を俟っての、古典テキストの注釈・解読のための基礎研究の重要性がより明晰に浮かび上がって来た。そこで、（3）フォーマルな勅撰和歌集のケースとは対照的な、より通俗的な物語文学の領域に対象範囲を広げ、出典・材源の個別的・書承的な検出だけでは克服できない古典テキスト解釈上の困難を克服するためには、本研究で推進してきた手法が極めて有効かつ不可欠のものであるとの確信を強めた。その試論の一端は『竹取物語』を読みなおす—神仙ワールドの復元的共有—」（2015年度和漢比較文学学会大会）で述べた。このほか、和歌表記と密接な関係をもつ仮名文字の成立過程に関し、新出の「なにはづ」木簡（9世紀後半）を実見し平安前期の仮名文字の使用様態に関する新たな知見を得（12月8日・京都市埋蔵文化財研究所）、清涼殿及び紫宸殿の内部等を実地に拝見し、専門官から詳細な説明を受けるとともに、他分野の研究者との討議を通じ、宮廷儀礼や政務の在り方について、貴重な知見を得た（京都御所28年3月23日）ほか、平安朝漢詩文に関する研究会等に参加し、和漢比較分野における研究交流及び資料調査等を行った。

（28年度）

礼楽思想に基づく勅撰的な詩歌集の存在の可能性については、東アジア圏における近似の類例を他に見出すには至らなかったが、『古今集』真名序を規範とする和歌勅撰の思想的背景解明のための歴代真名序の注解作業のうち、これまで不十分であった『新古今和歌集』～『新続古今和歌集』真名序注の第二次手稿を作成した（未発表）。

これまでの検証結果から、本研究で推進してきた手法が有効で不可欠のものであるとの確信を強めるとともに、古典研究には、テキストの分析者側に、作品成立当時の思考法（暗黙の前提的思想基盤）の復元的共有が不可欠で、より通俗的な作品群に対象範囲を広げての検討が必要であるとの認識のもと、研究期間

の1年延長を許可された機会を生かし、これをさらに推進した。(1)平安前期における集団表象としての「神仙ワールド」の復元による初期物語文学の成立のプロセスやテキスト解釈に新生面を拓く成果として、「方術の描かれる物語—『竹取物語』を読みなおす」、『『竹取物語』の漢文世界—物語文学における典拠・材源論に向けて—」の論文を発表。(2)「国風研究会」に参加し、高麗史、古代法制史、仏教美術史等の隣接諸分野の研究者との討議を経て、外来文化の摂取・受容における自国文化の変容動態についての学際的な知見を広めた。(3)招待講演「日本古典研究における昭和50年～60年代」(国際会議「戦争と平和—昭和天皇の日本」ワルシャワ大学図書館)、「日本古典研究の方法」(北京日本学研究中心)に参加し、国外の日本古典研究者との研究交流をおこなった。(4)中央欧州における日本学の国際会議の企画に参画し、外来文化との接触を通じたナショナルイデオロギの創出に関する総合的な国際会議の準備に協力した(国際交流基金の支援を受けワルシャワ大学にて開催する運びとなった)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

渡辺秀夫「『竹取物語』の漢文世界—物語文学における典拠・材源論に向けて」(『中古文学』・査読有・99号・2017年・印刷中)

渡辺秀夫「『国風文化』をどう捉えるか」(『古典文学の常識を疑う』査読無・勉誠出版・2017年6月・pp.56-59)

渡辺秀夫「方術の描かれる物語—『竹取物語』を読みなおす」(『平安朝文学研究』査読無・復刊第25号・2017年3月・pp.87-90)

渡辺秀夫「虚実の交響/求心と変容—小町のなるもの」(『国立能楽堂』査読無・397号・2016年9月・pp.25-28)

[学会発表](計7件)

渡辺秀夫「日本古典研究の方法」(2017年3月2日・北京日本学研究中心・中華人民共和国北京市)

渡辺秀夫「日本古典研究における昭和50年～60年代」(国際会議「戦争と平和—昭和天皇の日本」・2016年10月25日・ワルシャワ大学中央図書館・ポーランド共和国ワルシャワ市)

渡辺秀夫「『竹取物語』の漢文世界—物語文学における典拠・材源論に向けて」(平成28年度中古文学会大会春季大会・早稲田大学・2016年5月22日・東京都新宿区)

渡辺秀夫「『竹取物語』を読みなおす—神仙ワールドの復元的共有—」(2015年度和漢比較文学会大会・2015年9月13日・関西大学・大阪府吹田市)

渡辺秀夫「草創期の仮名文について—奏上時に「仮名序」は無かった」(2014年5月13日・北京日本学研究中心・中華人民共和国北京市)

渡辺秀夫「草創期の仮名文について—古今集仮名序をめぐって」(国際会議「平成の日本—日本的伝統からの離反と回帰」2013年10月14日・ワルシャワ大学中央図書館・ポーランド共和国・ワルシャワ市)

渡辺秀夫「古今集序を読むために」(和歌文学会7月例会・2013年7月20日・駒澤大学・東京都世田谷区)

[図書](計1件)

渡辺秀夫『和歌の詩学—平安朝文学と漢文世界』本文1-518 561総頁(2014年6月・勉誠出版)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

渡辺 秀夫 (WATANABE, Hideo)  
信州大学・人文学部・名誉教授  
研究者番号：90123083